

昔懐かし田舎芝居は楽しいよ!

小河内昭和劇団

結成はいつ頃?

昭和初期、田舎の村の楽しみと言えば、花見、花田植、神社の祭礼などの年中行事と二、三年に一度、近郊の町に訪れる旅回り一座の芝居興行や巡回映画でした。

村の若者は、いつしか旅回りの芝居に熱中し、いつか自分もあのような役者を演じてみたいと夢を抱くようになり、昭和三年、村の青年団の若者数名が、素人田舎劇団を立ち上げたのが、「小河内昭和劇団」の始まりです。

当時は、娯楽というものがほとんどなく、村の劇団はたちまち村の話題となり、秋祭りでの興行を始め、他の地域から声がかかれば、村に一台から二台あったパタノコの荷台に芝居道具や役者裏方を積んで、あちこちに興行していました。



計の方に興行に行つた時、バタンコに乗った役者の一人が酒に酔って道にころげ落ちたのに誰も気づかず、公演前に一人役者が足りないことで、大騒ぎになって探したという話があります。

戦後は、劇団にも混乱が?

戦後は、あだ討ちとか恨みを晴らすといった芝居は、GHQの占領政策でできなくなり、芝居の台本は全て検閲を受けなければ公演できなくなりました。

このため、そういった箇所は、観客に人気のあるあだ討ち物の芝居を演ずることはできず、大変困りました。当時の台本は今でも大切に保管しています。

今でも芝居の台本は、全て団員の手づくりですが、昔は、テレビもない時代でしたから、台本作りには随分苦労しました。当時の団長であった故原本座長は、時代小説や浪曲などから一節を取り出して創作したり、わざわざ広島市内まで遠出して、広栄座などで演じられていた芝居を見て帰って、一晩で台本を作ったこともあったと聞きます。

劇団の活動は、年々磨きがかかり、興行先では、連日大盛況。衣装や髪などの道具も次第に整い、全てが順風満帆でした。

しかし、昭和四七年梅雨時、連日の大雨で、太田川の所々が氾濫した日、劇団倉庫が強い風に飛ばされ、小河内川に流されてしまい、長年にわたって整えてきた芝居道具一瞬にして無くなるという悲しい出来事がありました。加えて、団員も高齢化し、復活せよという気力も失いついに昭和三年から続いた劇団の活動は、中断したのでした。

復活は、団員の二世の手で!

昭和五六年、初期の頃の団員の二世であった佐々木団長が、若者達に声をかけ、再生資金を集め、旅回り一座の古い芝居道具を数点購入し、念願であった劇団を復活させました。

以降は、毎年四、五回程度の公演や老人ホームへの慰問、秋祭りでの奉納など、精力的に公演を行い、団員一同頑張っています。当時の名声をもう一度高めよう』を合言葉に!

時代劇の名カットシーン

「木曾の名刀」

江戸に出ていた次三郎は、故郷へ帰る途中、木曾山中で山賊に会い、身ぐるみをはがされる。身の安全のため、一本の錆びた刀をもらうが、その刀を研ぐとみごとな名刀で、二百両で売れる。お金を持ち、山賊にお礼に行く...



設立時期 昭和3年
代表者 団長 佐々木忠義
座長 原本幸明
幹事 中野英治
連絡先 e-mail nkneij@yahoo.co.jp

「ご存知! 水戸黄門」



「飲べえ佐平次と夢の五十両」



真面目で腕のいい大工の佐平次は、一人息子を災害で失い、酒びたりの毎日を送る。

ある夜、枕元で「おっかあをいじめないで」という息子の声を聞いた佐平次は、翌朝真面目に働こうと棟梁の家に向かう途中、五十両入った財布を拾う...



公演前口上 東西、東西、皆様方に一言ご挨拶申し上げます

